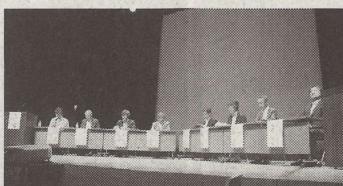


# 抽出課題做成針指

JC—圧送技術調査委が報生戸

## 相違点見出す



庄送業の問題点を話し合った

日本JCI会議  
26日、東京・大井町の  
きゅりあんでコンク  
リート圧送技術調査委  
員会の報告会を開い  
た。同報告会では「安  
全性検討ワーキンググ  
ループ(WG1)」「压  
送計画検討(WG2)」、  
建築土木指針の共通

A black and white portrait of a man with dark hair and glasses, wearing a light-colored suit jacket over a striped shirt and tie. He is holding a microphone close to his mouth, suggesting he is speaking or performing. The background is dark and indistinct.

中田委員長

では2005年にポン  
ブの施工調査委員会を設置し、2009年にコンクリート圧送工法ガイドラインおよび同解説2009」を発刊したとしたうえで、同委員会を設立した経緯について「ガイドラインはできたものの、土木、日本建築両学会

方法が異なる。そこで  
とは、圧送負荷の算定  
同委員会ではガイドラ  
インの後継となる圧送  
工法指針を作成するた  
め、情報収集を進めた」  
と述べた。  
WG1の活動報告で  
は、全国コンクリート  
圧送事業団体連合会の

北口延郎専務理事が、  
圧送に関する法令、規  
格、基準類について説  
明。施工管理者と圧送  
業者との間で安全性に  
対する認識の違いなど  
について統計を用いて  
解説した。日本大学の  
宮田敦典助手は作業者

業環境、圧送機器、圧送開始前、圧送作業中、作業終了後に元請担当者と圧送技術者がそれ事前に確認すべき項目をまとめた圧送作業の安全性向上に向けたチェックリストの導入を提案した。

スが増えている点をあげ、「土木と建築のコンクリートの圧送条件は近づいている」と指摘。それらを統合するため、JCIのガイドライン、両学会の指針の3つの相違点について説明した。

した。田送言語における課題では、ヤマコンの吉田兼治氏が実務者目線で課題と対策案を指摘した。特殊コンク

WGの活動報告の方法を提案した。後、報告者らと近未来コンクリート研究会の十河茂幸代表、コンクリート用化学混和剤協会の玉石竜介氏によるパネルディスカッションを開催した。ディレクターは中田委員長が務めた。

の転落やカンブ車の転倒など事故発生要因ごとの分析結果を紹介した。ものづくり大学の大塚秀二教授は輸送管の肉厚化と破損の実態、安全性の向上に向けて検討した調査結果

WG3では西学会のコンクリート圧送指針などの相違点に関する調査結果を徳島大学の橋本親典教授が発表した。橋本教授は土木のスランプが8cmから12cmに変わった点や、

WG2は圧送計画の重要性について清水建設の浦野真次氏が解説した。圧送性評価の変遷について日本建築学会会と土木学会の圧送負荷算定式の違いからどうのようにすべきか提案

内圧力損失(KV値)の推定方法の試案として、普通骨材を使用した生コンで標準管と呼ばれる100A、125Aの両管を用いた時のスランプ8、12、15、18、21cmのKV値の推定